

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 河村 瑛子

論 文 題 目

古俳諧研究

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 塩村 耕

委員 名古屋大学教授 阿部 泰郎

委員 名古屋大学准教授 大井田 晴彦

# 論文審査の結果の要旨

## 【本論文の概要】

本研究の対象である古俳諧とは、蕉風俳諧以前の貞門・談林時代の俳諧をいう。雅文学たる連歌に対する俗文学の意識が高かったために、必ず各句に俳言（俗語・漢語）を詠み込むこと、連句は蕉風俳諧以後のそれとは異なり、言葉の連想を重視すること、を特徴とする。つまり語彙の豊富な用例集積であるのみならず、語の持つ微妙なニュアンスやイメージを知りうる貴重な文化資料である。

第一部では、古俳諧を読む上で最も参考となる連想語辞書『俳諧類船集』を主に扱う。第一章は、『類船集』について、編者や編纂方法を概観し、伝承歌や童謡、唱え言などの宝庫であること、俗語や基本語についても、他の文献に拠ったのでは気付かれにくい語義を知ることを具体的に示す。第二章は「ものいふ」という語について、『類船集』で示される連想語を手がかりに注釈的に考察を進め、古俳諧をはじめとする古書の用例を吟味し、基本的に人間以外のものに用いる語で、その言葉によって状況を変化させ得るという意味が本来あったことを論証する。第三章は古俳諧と『類船集』を用いて、近世前期の異国観を検証し、「南蛮」「黒船」「いぎりす」「おらんだ」の要語について、後世にはわかりにくくなつたニュアンスを再現する。

第二部は古俳諧を通して芭蕉を読み直そうとする。第四章は、古俳諧資料より「背戸」に住人の内実を象徴するイメージのあることを指摘し、背戸を詠んだ芭蕉句の解釈に別の視点を提示する。第五章は、「かたち」について、古俳諧等より原義を探り、単なる形状の意ではなく、目前に実体が存在しないものを、実見するように思わせる、よすがとなるものの意があることを指摘し、「かたち」や類義の「かたみ」の用例から、そのようなものにこだわる芭蕉文学の特性を浮かび上がらせる。第六章は、芭蕉が晩年に多用し、軽みの特色の一とされる擬音語・擬態語表現について、類語を含めて古俳諧の用例を検証し、語のニュアンスをより正確に再現しつつ、古俳諧での用法を熟知した上で新しさを加えた用法とする。

第三部は古俳書の書誌的研究である。第七章は、近世俳諧の祖松永貞徳の、現存する唯一の自筆の独吟百韻作品である「壺の名に」百韻の重要な異本を詳細な注釈とともに紹介し、複雑な推敲課程とその意図について推論を加える。第八章は、天理図書館に蔵される、尾張鳴海の富豪俳人下里知足自筆の古俳諧等書留の中にある無題の笑話集が、万治二年刊の初期嘶本『私可多咄』であると同定する。同書は、寛文十二年刊の江戸重版本しか現存しないが、知足写本は現存しない上方版を写したものと推定し、本文の異同を考察して、初版の本文は書名に相応して「仕形咄」つまりト書きを省いた独り芝居風の演出を文章化しており、現存江戸版はその先進性を改悪している可能性を指摘する。第九章は前章で取り上げた重要資料である知足書留を、詳細な注釈とともに翻刻する。附録「古俳諧作品目録」は、散逸書を含めて、現段階で知られる全ての古俳諧作品を略解題とともに配列した資料年表である。

# 論文審査の結果の要旨

## 【本論文の評価】

古俳諧は、近世後期に山東京伝や柳亭種彦らにより主に近世前期の古風俗考証の資料として注目されたものの、蕉風俳諧を頂点と見なす文学史観から言語遊戯として軽視され、翻刻はもとより、国語辞典類の用例採集も一部分にとどまっており、研究は立ち遅れている。本論文は、ほとんどが版本・写本のままで残されている膨大な古俳諧作品の大部分の翻字を、論者自身が行い、全文データを手元に蓄積した上でなされた、史上初めての本格的な古俳諧研究である。

そして、それら古俳諧の連句の豊富な用例と、連想語辞典として稀有な資料である『類船集』とを組み合わせて、近代以降忘れられがちな、言葉に本来あった原義やイメージを再現し、それをさまざまな文学作品の解釈や、それのみならず文化史の知見に還元させている点に、本研究の特色がある。たとえば「ものいふ」の本義を考証し、古くは『土佐日記』の中で船頭が何気なく発した「黒鳥のもとに白き波を寄す」の言葉を、筆者が「物言ふやう」に聞いている場面を、白波（盜賊）の来襲を予言する禍々しさを感じているとする新解釈を提案する。また、古俳諧に見える用法から、「黒船」に畏怖と憧れとの両様の意味が込められているとし、幕末以降近代に至るまで外圧的状況をことさらに「黒船」と表現する心意の由来を考察している。

言葉が日常的なものであればあるほど、語義の変化は気付かれにくい。たとえば、『奥の細道』平泉の条で、「金鶏山のみ形を残す」は、一般に昔の形状をとどめていると無造作に解されるが、「かたち」の本義の考察や「かたちを残す」の表現例より見て、金鶏山が、今は失われてしまった過去の状況を知るよすがとなっている意味とする。また、芭蕉は、古人の心を知るのに文学テキストだけでは満足せず、「かたち」や「かたみ」の実見を求める心性がその根底にあったとし、『笈の小文』冒頭の「かたち花にあらざる時は夷狄にひとし」を、視覚でとらえたかたちから、眼前にない風雅を見出だそうとする精神と解釈する。これらは従来、十分に活用されていなかった貴重な文化資源である古俳諧資料を駆使して初めて知られるところで、前人未到達の新見に満ちている。

また、古俳諧資料探索の余祿として、古俳書の書留写本から、嘶本『私可多咄』の幻の初版本を見出だし、それが現存の江戸版の本文と異なる「仕形咄」としての性格を備えていたとの指摘は、嘶本研究史上、重要な発見となっている。附録の「古俳諧作品目録」は既存の目録やデータベース類から機械的に作成されるものではなく、年来の資料探索の労の上に成ったもので、網羅的な古俳諧資料目録として価値が高い。

近世語以外の一般的な語彙の原義を探る上で、古俳諧資料がどれだけの時代的な広がりを持った有効性を示しうるのかは、さらに各方面からの検証を要するが、今後の研究に新たな地平を切り拓いた労作の研究である。以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を与えるのにふさわしいものと判定した。